

# ディベートを大切にした「食」&「命」の学習 —「みんな生きている」の取り組みから—

村上 義輝

奈良県香芝市立真美ヶ丘東小学校

The Learning of Food and Life with the Debate Style in Primary School

Yoshiteru MURAKAMI

Mamigaoka Higashi Primary School, Kashiba City

## 1 はじめに

食糧問題や飢餓の問題など、世界全体で食環境が悪化している。その中で現代の日本の子どもたちの「食」に対する認識はあまりに貧弱だと感じる。子どもたちに好き嫌いや食べる量に偏向が見られるのは、「食」は「あって当たり前」という認識が一因になっているのではないかと推察される。「あって当たり前」という「食」についての子どもたちの認識を再考させ、自分自身の生活の仕方や自己の生き方を再構築するまで発展させる端緒になればと考え、本実践を試みた。

いっぽう、「命」が大切なことであることを子どもたちは頭では理解しているが、「なぜ命は大切なのか」「命はどのように大切にされなければならないのか」ということが理解されていないように思われる。大和肉鶏を雛から育て、生育したそれを食するという本実践を通して、「命」と「食」のつながりとその重みを感じさせたいと考えた。

食とは、外なる環境にある食物を身体という内なる環境にとりこむことである(鈴木 1993)。本

実践を「命」と「食」をつなぎ、そのありかたを再構築する環境教育の実践として位置づけたい。

大和肉鶏を「食する」かどうかという討論にあたっては、「なぜ命は大切なのか」「命はどのように大切にされなければならないのか」を子どもたちに十分に納得させるため、①自分の意見をまとめる。②自分の意見をみんなの中で発表する。③友達の意見を聞く。④自分の意見を練り直すという手順で行い、子どもたち同士の討論に十分な時間をとる必要があると考える。

なお、授業は「総合的な学習の時間」を活用して行った。本実践は、前任校である奈良県葛城市立忍海小学校5年生62人(2クラス)で行ったものである。一緒に取り組んでいただいた忍海小学校兵頭教諭、及び文章を校閲いただいた大阪教育大学鈴木善次名誉教授、真美ヶ丘東小学校本庄真教諭には深甚の感謝を申し上げる。

## 2 単元計画

「みんな生きている」という単元の計画を表1に示す。

表1 「みんな生きている」の単元計画

9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
*飼育活動の話し合いと準備(3時間)						
*飼育活動開始(10/6)		飼育活動			終了(3/17)	
*「命の学習」[米とウシ](8時間)			*討論[大和肉鶏をどうするか?](10時間)			
*教師による資糧箱の作成				*食する(3時間)		
*教師による通小屋の改築					*振り返り(3時間)	

### 3 実践の概要と考察

実践の概要を、「学年だより」や毎日発行している「学級通信」における児童たちや保護者たちの感想を引用しながら報告する。

#### 3.1 大和肉鶏を飼うぞ

子どもたちに「命を育てる経験をさせたいなあ」と考え、奈良県の畜産課に相談に伺った。そこで紹介された孵卵場から、大和肉鶏（奈良県特産物）のひなをいただけることになった。次の日、さっそくそのことを子どもたちに話すと、子どもたちは大騒ぎである。そんな中、「育てて食べるやなあ」という声が聞こえてきた。「じゃあ、どのように飼おうか」と言うと、いろいろな案が出た。

- ・大和肉鶏を飼う当番は日直がする。餌は何かがいいか資料で調べる。
- ・出席番号で5人ずつにする。等

あまりに多くの意見が出すぎ、收拾がつかなくなったので、大和肉鶏実行委員会を作り、メンバーを募集することにした。予想以上に手を挙げてくれる子が多く、驚いたが、両クラス6人ずつの委員会が発足した。そして実行委員会の名前が「やまと組」に決まった。

その委員会で話し合われた結果は、次のようであった。

- ・1組も2組も3人ずつ6人のグループを10班作る。
- ・飼育の経験のある子、もしくは何か知識のある子が必ず班にいる。
- ・それ以外の子はくじ引きで決める。

個人で動き出した子もいる。図書館に行って調べる子、インターネットで調べる子、知り合いや親戚で飼い方を聞いてくれる子が出てきた。本当によくやってくれるなあと感心した。そんな努力は、学年だよりに載せたり、廊下に掲示したりした。そんな中から分かってきたことは、一ヶ月ほどは育雛箱の中で育てなければならないというこ

とだった。教室で育てるにはいいが、休みの日の世話ができないのである。困って子どもたちに相談すると、「家に持ち帰って世話してもいいよ」という声をあげてくれた子が何人もいて、大変助かった。

10月6日、雛がやってきた。一辺が30cmほどの小さな箱に15羽の雛が入っていた。教員で作った飼雛箱に入れ、教室で飼いだした。日がたつにつれて、鳴き声が大きくなり、糞のおいぎつくなってきたので、普段あまり使われない特別教室へ場所を移した。雛がやってきた日、子どもたちは感想メモにこう書いている。

・ぼくはひながくるのが待ち遠しかった。今日、やっと会えた。小さくてかわいかった。一羽も死なせずに、大きくなるように育てたい。

一ヶ月ほどたち、動物ランドのウサギの小屋を改造した飼育小屋に雛たちを移した。当番は、朝、まず雛たちを外に出す。雛たちは、先住者であるウサギやアイガモを気にすることなく、10m四方の動物ランドを闊歩する。餌の倉庫を開けるや否や、当番は雛たちに囲まれる。「そんなにくっつくなよう」と言いながら、子どもたちはうれしそうにしている。ミミズを取りにいく者、腰をかがめて糞を掃除する者もいる。

そんなある日、一番小さかった一羽のメスが死んでしまった。当番の子たちは、休み時間にそれを埋めた。みんなにそのことを伝えると、「大きいのにつかれやっせん」「いつも首をひっこめていたなあ」「糞まみれになってたことあるで」と、子どもたちは知っていることを言い出した。子どもたちは飼育活動に主体的に関わっていたと推察される。

シャモの血を引く大和肉鶏であるから、つつきあいをするということは、県畜産課の職員の方から聞いていた。しかし、一度でも群れから離してしまうと、二度と群れに戻れないことも聞いていたので、結局そのままにしていたのである。

埋めるのが浅かったなあと思ったので、昇からAさんと埋め直しに学校へ行きました。スコップで少し掘ったあと、手で掘り始めました。すると、すぐにやまとちゃんのせなが見え、頭も見えてきました。私はそっとやまとちゃんを抱いてみました。びっくりしてしまいました。やまとちゃんの体がとっても冷たかったです。朝、埋めたときはまだこんなに冷たくありませんでした。本当に死んだなんて思えませんでした。指も人間みたいでした。私たちは穴を掘り直し、葉っぱをしいて、思いを書いて置いて、交代に土をかけて最後にいっしょに顔に土をかけました。「やまとちゃん、死なせてごめんね。なかまは、がんばってりっぱに育てるからね」

子どもたちは、冬休みも当番を決め、朝9時に学校にやってきた。日記にその時の様子を書いている子もいた。

・12月31日金曜日、大和肉鶏の世話に行った。「明日が正月なのに…」

### 3.2 やまとちゃんをどうしよう

2月も中旬を過ぎ、「これからやまとをどうしていくか」を考え始めると、子どもたちは悩んだ。問いかけをした頃は「6年になっても育てる」「卵を産ませて、雛を育てよう」「食べるのはかわいそう」という意見がほとんどであった。育てている間にペットのように愛着がわいてきたのだろう。大和肉鶏の習性などに関する知識がなかったこと、孵卵器で卵をかえす困難さも含めて、これから当番のことなど、具体的な考えを持っていない子がほとんどであった。

そこで、「学年総会で決めよう。」ということになったのであるが、その前にクラスで数回ディベート形式で討論を行った。

「食べる派」の中には、「これ以上増えたら、育てるのが大変だ」「育てるのがめんどうくさい」「食べてみたい」といった意見が多く、「育てる派」

を納得させるような意見は出てこなかった。また、「育てる派」からは「食べるのはかわいそう」「せっかく育ててきたんだから、卒業まで育てたい」と、目の前の現実とかけ離れたところで意見を言うだけで、今度は「食べる派」が納得しなかった。

そんな中、「やまとが病気にかかっていたら食べられないから、育てるしかない」という意見が出てきたので、奈良県南部家畜保健所にやまとを見ていただいた。結果は、非常に健康で羽につやもあり、元気だということが分かった。「大和肉鶏はシャモの血が入っているので、オスがよくつつきあいをするが、大切に育ててもらっているせいか、おとなしいなあ。」ともおっしゃって下さった。しかし、この何気ないおほめの言葉が、子どもたちの上に大きくかぶさってきた。

大和肉鶏のつつきあうという習性、オスが多すぎることからくるオスのストレスのことなどが分かってくるにつれ、「食べるのがかわいそう」と言っていた子たちの何人かが、「このまま育てて、つつきあいをしたり、病気になるって死んでいくより」と考え方を改めていったのである。

学年総会で討論が始まった。討論終了後の感想メモを紹介する。

・食べるのがいいんじゃないのかな？ 初めは「食&命」ということで飼っていたんだし、これから物を食べる時、その食べ物に感謝できると思う。今までに生きていた命をもらうと、実感できると思う。やまとちゃんも、その方がうれしいかもしれないし…。ちょっと残酷かもしれないけど、私はそれがいいのかも？

・私は大和肉鶏をこれから6年生になっても育てていきたい。理由はやっぱり今まで一生懸命育ててきたんだから、死んでしまうまで最後まで育てていけたらなあと思います。はじめに先生たちがもってきた所に返すとか、この5年生の誰かの家で育ててもらえないんじゃないかなあ。でも、絶対いやなのが食べることです。

・私たちが6年になっても、先生が同じなら

まだ育てていけばいいと思います。なぜなら、「食べる」とか言っている人がいるけど、かわいそうだからです。まだ、大きくなるかもしれないのに、途中で殺すのはかわいそうだし。担任がちがっても、育てていいなら育てたい。だめなら、みんな家の人に聞いて1羽でも引き取ってもらえるなら、引き取って飼ってもらおう。でも、引き取る家がなかったら、もう殺すしかないのかなあ？ でも、殺すってものすごくかわいそう。みんなで育ててきたんだから、育てたいと思う。

学年ディベートが終わった時点で、「育てる派」は約6分の1ほどいた。そこで、感想メモの中に理由も書いてある数人分を学年便りに載せ、全員で読みあい、感想や意見を聞いた。そして、その後、教師から、「全部ニクにする」か「オス1羽とメス1羽を残して、後はニクにする」の二者択一を迫った（「ニク」と表記するのは、普段食べている肉と違い、今日の前にいる鶏との同一性を意識させるためである）。子どもたちが出した結論は、「全部ニクにする」である。ただ、実際に食べるかどうかは個人で選択できるようにしておいた。最終の話し合いの後、感想メモにはこう書かれていた。

#### 【育てる派の意見】

・卵がふ化していくのを見るのも勉強だし、卵を食べるのも勉強になる。でも、「食」はいつでも勉強できるが、「命」を育てる勉強はふだんはできないと思う。ふ化するところも知りたいし、「命」のこともくわしく勉強したい。

・命を絶つのもりっぱな勉強になると私も思うけど、命（生命）から命（生命）ができるのを見てみたい。「命の大切さ」と、よくみんなが言っていたけど、私はよく考えなおしてみれば「命の大切さ」について本当にちゃんとわかっていたかどうか聞かしてみると、「はい、〇〇です。」とは言い切れないと思いました。

・卒業するまでのぎりぎりのところまで育てたい。そのとき、やまとを食べる。みんなで協力したら、まだ、やまとを育てていけるのではないかと私は思います。協力する友だちの「わ」も広がる。「食」の勉強もできるし、「命」の勉強もできる。食べる人は、いい体験と言うけれど、育てて卒業した方が、もっといい体験じゃないかなあと思いました。

#### 【食べる派の意見】

・育てる派の人ほどどこまで育てて、どうしていくか言っていなかったのでもそこを出して欲しいと思う。最終的には食べなくてはならないと思う。それをかわいそうというのはおかしいと思う。なぜなら、死んだときも同じだから。卒業するとき、どうするのかすごく聞きたい。なんでも育てるといえるのはかなりしんどいことは分かっているから。

・「命」という勉強は、命が生まれ、命が育ち、命が絶つとこの3つだと思う。「食」という勉強はほくたち人間が育てた動物または米などの植物を自ら自分たちで食べることだと思う。「食」というものも命がなければ、生まれぬ。「命」というものも「食」がなければ、死んでいく。どちらも大切なものだから、どちらも経験したい。」

・大和肉鶏を育てる苦勞を知ろうと言うことで飼いはじめた。その結果、みんなは苦勞や命の大切さを学べたと思う。だから、今度は自分で育てた大和肉鶏を、命を絶って食べて、その重みとかを知ろうという勉強をしたらいと思う。

・「食」というのは食べること。「命」は生きているといういわゆる生き物である。だから、「食」と「命」の勉強で食べるというのは、単に「生きている物を食べる」ではなく、「生き物を食べ、その意味を勉強することだ」と思う。

・前にも書いたように、感謝できると思うし、6年生まで飼って病気になって死んでしまうより、食べて何かの役にたった方が、「やま

と]もうれしいと思う。それに、「食」の勉強にもなるし、理科で習ったとは別の「命を受け継ぐ」ということになる。こんな経験はもう2度とないと思う。

・夏から勉強してきて、ぼくたちは今まで普通に他の物の命を食べているけど、それには育てている人の苦労があることを知り、それにその命をなくしぼくたちにくれるから、生きていけると思った。

このディベートの「命の大切さ」と、よくみんなが言っていたけど、私はよく考えなおしてみれば「命の大切さ」について本当にちゃんとわかっていたかどうか聞かれてみると、「はい、〇〇です。」とは言い切れなかったと思いました。」「食」というのも命がなければ、生まれない。「命」というのも「食」がなければ、死んでいく。どちらも大切なものだから、どちらも経験したい。」「食」と「命」の勉強で食べるというのは、単に「生きている物を食べる」ではなく、「生き物を食べ、その意味を勉強することだ」と思う。」等の子どもたちの意見から、「命」と「食」のつながりを理解し、それらの重みを感じ取らせることができたと考えられる。

長い長い時間をかけたディベートのあとで、一歩進めて、毎日の食事について振り返らせたあと、次のように子どもたちに話した。

・「大和肉鶏の今後をどうするか」について、長い時間をかけてディベートや学年合同の話し合いで結論は出ました。が、その結論を一年間の総合的な学習「食」と「命」のまとめとして受け止められるでしょうか。「食」と「命」は、「食の勉強」「命の勉強」とそれぞれ別々のものではなく、最初は別々にスタートしましたが、大切なのが「&」の部分で、その関係をどう学べたかなのです。(中略)大和肉鶏は、明日、御所の奈良県南部家畜保健所でさばいてもらおうと思います。

3月17日、大和肉鶏が運ばれてきました。

・今日、やまとが家畜保健所にいった。最後、やまとを運ぶとき、やまとはすごく重かった。みんなまで育ててきたからだと思う。

・今日、やまととお別れをした。さびしいけど、メスがいるから、いいや。やまとがどんな姿でかえってくるか、楽しみ。おじさん、いいニクにしてください。木曜日、それをニクにする。食べるときは、感謝をこめて「いただきます」と言いたい。

3月22日、大和肉鶏を調理実習した。

・やまとがきれいなニクになって、帰ってきました。ニクにして下さった人、ありがとう。料理しているときは、うまくできればいいなあと思っていた。食べたら、おいしかった。かんでいると、いままで育ててきたこと、走っているところ、えさを食べているところが頭にうかんできた。なんかさみしくなってきた。でも、飼育委員会でメスを飼ってくれるから、また楽しいこともありそうだ。

・今まで大切に育ててきた大和肉鶏。ぼくはやまとを食べるのがつらかった。でも、ぼくたちのためにニクになってくれたことを思いながら、やまとのニクを食べました。ぼくはこの思い出を忘れないと思う。ぼくはやまとの羽をもらったとき、ぼくは何も考えずにポーッとその羽を見ていました。そして、ランドセルの小さいポケットに入れました。大事にしたいです。やまとはみんなの心の中で生き続けると思います。

子どもたちの様子をじっと見守ってくださっていた保護者の方から、たくさんの手紙をいただいた。

・「大和肉鶏を食べて」という息子の作文を読んで、この「食」と「命」の学習の成果が分かりました。「はじめは何も思わなかったけれど、食べる時と食べた後に、小屋を

掃除したことやえさをやったこと、つまり育てたことがうかんできました。やまとで2つのことを勉強できた。どっちも大人になっていくのに大切なことだと思う。食べることがその命を活かす。やまとには感謝の気持ちでいっぱいです。」としめくくっている彼の作文。これにつきます。何も難しいことを調べたり、考えたりすることだけが学習じゃないと思います。この子たちにとって、自分たちが一生懸命に育てた命を食するという経験は、一生忘れられないものになると思います。人間の原点に戻って、「食」と「命」を大人の私たちにも考えさせていただいた1年でした。

・大きいテーマの学習でした。自分たちが世話したニワトリを食べる。「子どもたちはそれで命の大切さが分かるだろうか」と批判的にさえ思いました。しかし、今は思い切った新たな試みでの学習方法をしてもらい、ありがたく思います。みんなでディベートをくりかえしたことで、ニクを食べた時の気持ちを忘れることはないと思います。

・大和肉鶏のひなをいただいた日のあの興奮した話しぶりの中には、単にペットを育てるといったイメージしか持っていないようでした。そして、親の私でさえ、まさかこんな結末になるとは想像もしておりませんでした。「総合的な学習」というマスメディアを通して、表面的には理解していたつもりでしたが、いろいろなテーマのある中で、「食」と「命」は「生きる」ということをもっと具体的に身をもって知ることができ、大変意味のある課題提供だったと思います。小学校生活の中で、「生き物を処分して食する」といったことが起こり得るとは思ってもみませんでした。正直、大変ショックでした。しかし、それが動物虐待ではないことは長い間かけて話し込ん

だこのたくさんのレポートが証明しています。単なる詰め込みの教育ではなく、考えること、自分の意見が語るができる子どもたちが、将来増えることを「総合的な学習」に期待したいと思います。また、こんな教育を受けられる子どもたちをうらやましく思います。

「自分たちが世話したニワトリを食べる。「子どもたちはそれで命の大切さが分かるだろうか」と批判的にさえ思いました。しかし、(中略)みんなでディベートをくりかえしたことで、ニクを食べた時の気持ちを忘れることはないと思います」「小学校生活の中で、「生き物を処分して食する」といったことが起こり得るとは思ってもみませんでした。正直、大変ショックでした。しかし、それが動物虐待ではないことは長い間かけて話し込んだこのたくさんのレポートが証明しています」等の保護者の感想から、育てたものを食するという実践においては、ディベートの役割が大きいと考えられた。

#### 4 おわりに

本実践を通して、以下の成果があったと考えられる。

- ・子どもたちに、「命」と「食」のつながりを理解し、それらの重み実感させることができた。
- ・子どもたち同士でのディベートに十分な時間をとることができたので、「なぜ命は大切なのか」「命はどのように大切にされなければならないのか」ということを理解させることができた。

#### 引用文献

- 鈴木善次, 1993, 環境教育としての「食」と「農」をどう教えるか, 自然と人間を結ぶ・自然教育活動, 24: 173-180, 農文協.